

ニーベルンゲン伝説におけるブリュンヒルデ像の変遷

石 川 栄 作

Zum Wandel der Brünnhilde-Gestalt in der Nibelungensage

ISHIKAWA Eisaku

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 1340-5632

第 24 巻 別刷 2016 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

The Faculty of Integrated Arts and Sciences

Tokushima University

Volume XXIV , December 2016

ニーベルンゲン伝説におけるブリュンヒルデ像の 変遷

石川栄作

Zum Wandel der Brünnhilde-Gestalt in der Nibelungensage Eisaku ISHIKAWA

Abstract

In der vorliegenden Arbeit soll der Wandel der Brünnhilde-Gestalt in der Nibelungensage untersucht werden.

Die Nibelungensage, die im 5. und 6. Jahrhundert in Rheinfranken entstanden war, wurde am Anfang des 9. Jahrhunderts von Wikingern nach Nordeuropa überliefert und verband sich mit der nordischen Mythologie. Dort spielt der nordische Gott Odin eine wichtige Rolle. Brünhild ist auch nordisch gestaltet und bringt schließlich aus Neid ein Unglück in der Beziehung mit Siegfried, nämlich Anlass zum Mord Siegfrieds.

Danach wurde die Nibelungensage, die sich neu in Deutschland entwickelt hatte, gegen Ende des 12. Jahrhunderts von den Hanse-Kaufleuten nach Norwegen. Daraus entstand die Thidrekssaga gegen 1250, wo Kriemhild statt der Frau Brünhild nunmehr eine Hauptperson ist und Brünhild nur den Zank mit Kriemhild, nämlich Anlass zu Siegfrieds Mord verursacht.

Dieser Thidrekssaga steht das Nibelungenlied näher, das am Anfang des 13. Jahrhunderts in der österreichischen Gegend der Donau entstand. Hier ist Brünhild zwar eine Königin in Island und tritt aber nur als Nebenperson auf, die später die Tragik des Mordes Siegfrieds verursacht.

Nach der Entstehung des Nibelungenliedes wurden manche Werke der Nibelungensage geschaffen, wo der Held Siegfried nur eine Tochter eines Königs aus der Gefangenschaft des bösen Drachen rettet und solche eine Frau wie Brünhild deshalb niemals erscheint.

Die Frau Brünhild tritt wieder erst in den Werken des 19. Jahrhunderts auf. In der Trilogie „Die Nibelungen“ (1860) von Friedrich Hebbel wird Brünhild, genau so wie Siegfried, als die nordische mythologische Person behandelt, obwohl der Verfasser als Material hauptsächlich das Nibelungelied benutzt hatte.

In „Der Ring des Nibelungen“ (1876) von Richard Wagner wird auch Brünnhilde als nordische mythologische Person gestaltet. Wagner benutzte als Material nicht nur das Nibelungenlied, sondern auch die nordische Mythologie. Brünnhilde ist nunmehr die Tochter zwischen dem nordischen Gott Wotan und der nordischen Göttin Erda. Sie dient dem Vater Wotan als eine der Walküren, aber muss auf dem hohen Felsen zur Strafe des Verstosses gegen seinen Befehl schlafen, bis ein furchtloser Held sie im Feuer erwecken wird. Der furchtloser Held ist Siegfried. Nachdem Brünnhilde von ihm erweckt wurde, entschließt sie sich, nicht als eine Walküre, sondern als eine liebende menschliche Frau mit dem liebenden Helden Siegfried zu leben. Das Ehepaar fällt aber zur Beute der List des Bösewichtes Hagen. Brünnhilde bringt aber der Welt eine Rettung, indem sie zum Opfer fällt. Darin liegt die Eigenschaft des Werks von Wagner.

In dem Film „Ring of the Nibelungs“ (2004) von Uli Edel tritt auch Brünnhilde, Königin in Island, als kühne Heldin auf, die die göttliche starke Kraft von den nordischen Göttern gewinnt. Die Eigenschaft steht darin, dass sie den Willen der nordischen Göttern, d.h. die Liebe mit Siegfried, durchsetzt.

Daraus sich ergibt, dass die Charakteristik der Brünnhilde-Gestalt in zwei geteilt wird: Verbindung mit der nordischen Mythologie und die mit der deutschen Sage. Jene ist Brünnhilde bei Richard Wagner. Sie ist aber nicht eine Frau, die ein Unglück aus Neid bringt, sondern eine Frau, die der Welt eine Rettung bringt. Darin steht die Charakteristik von Wagners Musikdrama.

はじめに

ニーベルンゲン伝説の研究に携わってからもう 40 年以上になる。ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を中心にして、中世以降のニーベルンゲン伝説作品にも触れて、ニーベルンゲン伝説の系譜を研究してきた。その関係で当然のことながらワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作にも取り組み、『ニーベルンゲンの歌』とワーグナーの『指環』四部作を中心としたニーベルンゲン伝説の系譜研究は、40 年以上にも及ぶライフワークとなっている。ニーベルンゲン伝説の主人公の中でも英雄ジークフリートについては、これま

で紀要論文をはじめ、数冊の本の中でも、また数回の講演の中でもいろいろと述べてきたが、その相手役のブリュンヒルデについてはまだ十分言及しているとは言えない。

そこで本稿ではブリュンヒルデを取り上げて、古代ゲルマンの時代から中世を経て、近代および現代までのブリュンヒルデ像の変遷を辿っていくことにしたい。その際、当然のことながら、常にジークフリートとの関係で述べていくことになるので、本稿はこれまでの論文・著書・講演と重複する部分も出てくることは、あらかじめお断りしておく。本稿は 40 数年間に及ぶニーベルンゲン伝説系譜研究のブリュンヒルデに関する集大成ということにしていなければ幸いである。

Ⅰ. ブリュンヒルデ像の原型——古代ゲルマンの民族移動時代——

ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作の主人公とも言うべきジークフリートとブリュンヒルデについての伝説の原型は、一体いつの時代にまで遡るのだろうか。この二人の人物は 13 世紀初頭の『ニーベルンゲンの歌』に登場し、その中世英雄叙事詩はブルグント族の三人兄弟が登場したり、そのブルグント族が 437 年にフン族のエツェル王によって滅ぼされたという歴史的事実を素材にしていることから、5、6 世紀の古代ゲルマンの時代にまで遡ることは確かである。

その『ニーベルンゲンの歌』や北欧に遺されているエッダ・サガをつき合わせて検討することで、ジークフリートとブリュンヒルデについての伝説の原型を再構築したのが、アンドレアス・ホイスラー（ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』1921 年）というドイツのニーベルンゲン研究者¹⁾である。そのアンドレアス・ホイスラーによると、その伝説はブリュンヒルト伝説といい、次のような内容であったと推定している。

ホイスラーによるブリュンヒルト伝説の原型

ライン河畔ヴォルムスにブルグントの国王兄弟、すなわち、ギービヒエの三人の息子たち——グンテル、ギーゼルヘルそしてゴトマル——が君臨していた。彼らにはグリーンヒルトという美しい妹がいて、彼らの武術の師匠が残忍なハーゲンであった。

¹⁾ Andreas HEUSLER: Nibelungensage und Nibelungenlied, Druck und Verlag von Fr. Wilh. Rufus, Dortmund 1921. (Neuaufgabe 1973. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt)

ある日、彼らの宮廷にニーダーライン(ライン河下流)のジグムント王の息子ジークフリートが馬に乗ってやって来た。彼は孤児として荒野の中で、妖精の鍛冶屋のもとで成長し、恐ろしい竜を退治して、その溶けた皮膚の角質層によって不死身となり、両肩の間の1か所を除けば、傷つけられ得ないという英雄である。彼はまた、遺産をめぐる争っていた妖精の領主たち、つまりニーベルンゲン族を打ち殺し、そのニーベルンゲン財宝を奪い取った。その財宝を彼は馬に積んでいるのである。

ギービヒュー族は勇士ジークフリートを丁重に迎え入れた。彼らはその勇士と兄弟の誓いを交わし、彼を共同支配者としたのみならず、妹グリームヒルトを妻として彼に与えた。ジークフリートはギービヒュー宮廷を支え、輝かしい存在であった。

あるとき、勇敢な乙女ブリュンヒルト(ブリュンヒルデはワーグナー作品での表記であり、普通はブリュンヒルドまたはブリュンヒルトと表記するが、本稿では後者に統一する)の噂が伝わってきた。彼女ははるかに遠い北方の島に君臨していた。その城の周りには不思議な炎の壁があった。その壁を越えて彼女のもとに辿り着くことのできる勇士だけに妻として従うという誓いを立てていた。グンテルはこの女王に求婚しようと望んだ。そこでジークフリートが道を知っていたので、グンテルを案内し、彼に援助することになった。

彼らは四人でライン河を下って、海に出た。ブリュンヒルトの炎の壁の前に立ったとき、グンテルは馬に拍車をかけて炎を跳び越えようとするが、馬は後ずさりする。ジークフリートは自らの馬を彼に差し出したが、その馬でもグンテルは前に進むことができない。そこで、ジークフリートが彼と姿を交換し、自分の馬に乗り、炎に向かって疾駆すると、大地は揺れ、炎は天に向かって荒れ狂い、やがて沈み、英雄の前で消えた。

ジークフリートはブリュンヒルトの前に立つと、自らをギービヒューの息子グンテルと名乗り、彼女を妻にしたいと言った。彼女はためらった。なぜなら、炎の試練に打ち勝つ者がいるとすれば、それはただ一人、竜を殺した英雄ジークフリート以外にはいないと思っていたからである。しかし、誓いを催促されて、彼女はグンテルの妻となる決心をする。三夜、ジークフリートはグンテルの姿でブリュンヒルトのそばに寝たが、初夜はそうにする習慣だと言って、二人の間には抜き身の剣を置いていた。四日目の朝、彼はブリュンヒルトの手から指環を抜き取った。そのあと彼は供のもとに戻り、再びグンテルと姿を交換した。彼らはブリュンヒルトを伴ってヴォルムスに帰ると、婚礼の宴が催された。ジークフリートは指環を妻グリームヒルトに与えて、すべての事情を妻

に話しておいた。

彼らは平穏な年月を過ごした。ところが、あるときブリュンヒルトとグリームヒルトがライン河で水浴びをしていたとき、ブリュンヒルトが上流に行ったため、口論となった。まずブリュンヒルトが「私の夫グンテルは第一の勇士であり、炎を跳び越えたが、あなたの夫ジークフリートは森の猛獣とともに暮らし、鍛冶屋の下僕であった」とけしかけると、グリームヒルトは「私の夫は竜を退治し、妖精の財宝をも獲得した。さらに炎を跳び越えて、あなたの指環を奪い取ったのも私の夫ジークフリートです。あなたは私の夫の側女(そばめ)です」と言い返して、証拠として指環を見せた。ブリュンヒルトは蒼ざめて館に帰り、その晩は一言も口にしなかった。グンテルが二人きりになって尋ねると、彼女は彼に嘘を交えてこう訴える。「ジークフリートは初夜の寝床であなたを裏切る行為をしました。私は一つの館に二人の夫を持ちたくありません。あの男ジークフリートを殺してください。さもなくば、あなたか私のいずれかが死ななければなりません」。

グンテルは弟たちのもとに行き、兄弟の誓いを破ったと言って、ジークフリートを暗殺することを提案する。ギーゼルヘルは忠告して言う。「ブリュンヒルトは妹を妬んでいるのです。けしかけられてはなりません。この国が安泰なのもジークフリートあってのことです」。すると、残忍なハーゲンが言葉をはさんで、「ジークフリートが息子とともに亡き者となれば、我々の上に立つ英雄はいない。我々はニーベルンゲン財宝の持ち主ともなるのだ」と主張する。兄弟たちは同意し、ハーゲンが暗殺の役目を引き受けた。ハーゲンはジークフリートとの兄弟の誓いに加わっていなかったし、ジークフリートの背中の傷つく箇所を知っていたからである。

ハーゲンとグンテルは狩りを催し、五人全員で猪を追いかけた。喉が渴いたので、彼らは小川で水を飲むことにした。ジークフリートが飲もうとして腹這いになった瞬間、ハーゲンは槍を両肩の間に突き刺す。槍はジークフリートの心臓を貫き、ジークフリートは裏切り者たちを呪いながら、また妻と子供のことを思いながら、息を引き取る。彼らは遺体を運んで、夜になって帰宅し、グリームヒルトの寝床に投げ込むと、彼女はその血で目覚めて、悲鳴をあげる。ブリュンヒルトはその叫び声を聞くと、大きな声で笑う。グリームヒルトはただちに暗殺されたことを悟り、兄弟たちに訴えるが、彼らは勝利の歓びに浸(ひた)って夜更けまで酒宴を張る。

翌朝、ブリュンヒルトは皆を自分の前に呼んで、真相を打ち明ける。すなわち、「ジークフリートは、抜き身の剣で初夜の寝床を分けて、グンテルに対して

兄弟の誓いを忠実に守った、グンテルの方こそその誓いを破ったのだ」と告白するや否や、ブリュンヒルトはすばやく剣を胸に突き刺して、自ら生命を絶ってしまうのである。

以上のような内容のブリュンヒルト伝説が 5、6 世紀にライン河畔フランケン領土で生まれたと、アンドレアス・ホイスラーは推定するのであるが、このような伝説が生まれる背景にはどのような歴史的事実が関与していたのだろうか。残念ながら、断言できるものはないが、ただホイスラーはビザンチン帝国の歴史家プロコップ(5 世紀末～565 年)の『ゴート戦争』(Ⅲ-1)²⁾に読み取られる史実を指摘している。それによると、540 年頃、ゴート族のある貴婦人が水浴中に王妃を侮辱したというものである。王妃は泣きながら夫のもとに戻り、復讐を要求する。国王はそのゴート女性の夫を裏切り者として殺害したというものである。残念ながら、プロコップはそれらの人物の名前を挙げていないし、またこれは不死身の英雄ジークフリートのエピソードとは無関係の資料に過ぎず、いずれにしてもこの説の確証はない。

その後、フーゴー・クーンという研究者はこの伝説の素材としてメロヴィング王朝の出来事³⁾を挙げている。それは 575 年の出来事で、アウストラージェンのジギベルトとその弟であるノイストリエンのヒルペリヒとの争いである。兄ジギベルトは西ゴート国王アタナギルトの娘ブルンヒルトと結婚していた。一方、弟ヒルペリヒ王はブルンヒルトの妹カイルスヴィンタを離別させて殺害したあと、フランケン出身の女性フレデグントを妻に迎えていた。両王妃は憎み合い、それが兄弟の戦いとなった。勝運は兄ジギベルトにほほえみ、弟ヒルペリヒは戦死を遂げた。この屈辱に対してヒルペリヒ王の寡婦(かぶ)フレデグントは刺客を使ってジギベルト王を暗殺したというものである。しかし、このフーゴー・クーンの説も、たとえば、竜退治の英雄ジークフリートとはまったく関係のない資料に過ぎない。

またヴァルター・ハンゼンという元ジャーナリストの著述家⁴⁾は、アウストラリエンのジギベルト王の妻ブリュンヒルトとノイストリエンのヒルペリッヒ

²⁾ Vgl. Andreas HEUSLER: a. a. O. (Neuaufgabe) S. 9. PROKOP: Gotenkrieg. Übersetzt von Dr. D. Goste. Verlag von Franz Duncker. 1885. S. 174.

³⁾ Vgl. Gottfried WEBER: Nibelungenlied. (Heldendichtung II) Stuttgart 1961. S. 24.

⁴⁾ Walter HANSEN: Die Spur der Helden. 1988. 金井英一・小林俊明訳: 『ニーベルンゲンの歌』の英雄たち 河出書房新社 1996 年 33-50 ページ。

王の妻フレーデグンデとの複雑な経過を辿る確執を中心にして、メロヴィング王朝の出来事をさらに詳しく調べ上げているが、このブリュンヒルトがニーベルンゲン伝説において北の島に君臨する女王としてのブリュンヒルトのモデルになったという確証はない。

このようにブリュンヒルト伝説に関しては、確証するに足る歴史的事実を指摘するのは困難であるが、ただこのブリュンヒルト伝説はゲルマン民族大移動時代の厳しい生活条件の中から生まれてきたことだけは明らかである。ホイスラーも指摘しているように、この伝説は 580 年頃に生まれた歌謡であり、夕方など従士たちが杯を交わしている間に、スコープと呼ばれる宮廷詩人たちが約 15 分間の歌謡を朗読して聴かせたものであったろう⁵⁾と推測されよう。

II. 北欧への第一次伝承におけるブリュンヒルト像の特徴

——『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』——

こうして 580 年頃にライン河畔フランケンの領土で生まれたと推定されるブリュンヒルト伝説は、その後、北欧へ伝承されることになるが、この北欧伝承は大きく二段階に分けることができる。まず第一次伝承はヴァイキング等によって口頭で遅くとも 9 世紀初めには北欧へ伝承されたもので、それらをのちに文字によって書き遺したものが、『歌謡エッダ』⁶⁾と『散文エッダ』(『スノリのエッダ』とも呼ばれる)⁷⁾並びに『ヴォルスンガ・サガ』⁸⁾である。これらはいずれも古い伝説相を伝えるもので、ニーベルンゲン伝説の原型を推定させる貴重な資料である。

『歌謡エッダ』は 9 世紀初めから 13 世紀初めにかけてノルウェーあるいはアイスランドへ伝えられた 37 編の歌謡集で、そのうち 19 編がニーベルンゲン伝説に関係のあるものである。その 19 編のうち 7 編においてブリュンヒルトが

⁵⁾ Andreas HEUSLER: a.a.O. (Neuaufgabe) S.10 und S.12.

⁶⁾ Gustav NECKEL/Hans KUHN(Hrsg.): Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. 5. verbesserte Auflage. Heidelberg 1983. 谷口幸男訳: エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社 1973 年

⁷⁾ Gustav NECKEL/Felix NIEDNER(Übertragen): Die jüngere Edda. (Thule 20.Band) Verlegt bei Eugen Dietrichs in Jena 1925.

⁸⁾ Volsungasaga. In: Paul HERRMANN (Übertragen): Isländische Heldenromane. Verlegt bei Eugen Diederichs in Jena 1923. (Thule 21.Band) (Neuausgabe 1985, Paul HERRMANN(Übertragen): Nordische Nibelungen 菅原邦城訳: ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会 1979 年

登場するが、とりわけ『シングلزの短い歌』（11世紀末または13世紀初め、アイスランド）では、先程紹介したブリュンヒルト伝説の原型とほぼ同じ話が展開されている。

ただこの『歌謡エッダ』は年代と作者を異にした歌謡の集録であり、類似的な歌謡が集められているだけで、一つの明白な筋を生み出すようにはまとめられていない。これらの歌謡を一つにまとめて、大きな一つの物語となっているのが、『ヴォルスンガ・サガ』である。ワーグナーはこの『ヴォルスンガ・サガ』を大いに利用している。

この北欧第一次伝承の『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』におけるブリュンヒルトの特徴をまとめると次のようになる。

1. 戦乙女（いくさおとめ）ブリュンヒルト

まずブリュンヒルトは、『ヴォルスンガ・サガ』では、ヒンダルヒヤルの山で炎に囲まれて男装して眠っている戦乙女（ワルキューレ）として登場する。その炎を飛び越えて彼女を目覚めさせるのが、退治した竜の血が舌に触れたことで、小鳥の言葉が理解できるようになった英雄シングلز（ジークフリート）である。彼女は、小鳥の言葉に従ってここにやって来て、自分を目覚めさせてくれたシングلزに向かって、自分はオーディン（ヴォータン）の意に反してヒャールムグンナルを倒したために眠りの棘で刺されたことや、オーディンに結婚を強制されたが、恐れを知るような男とは結婚しないという誓いを立てたことなどを語る。ワーグナーの展開とほぼ同じと言ってよいだろう。ただこの場面でブリュンヒルトはシングلزに長々とさまざまなルーネ文字の教えを受けることになっていて、そこが北欧文学特有のものとなっている。いずれにしてもシングلزはブリュンヒルトが知識豊かでたいへん賢いことに感心して、彼女と婚約することになっている。しかもその後、彼女のもとを去って、再び再会した折りに2度目の婚約を交わしたりする。2つの歌謡を一つにまとめたために、婚約が2回になったのだと思われる。

2. ブズリ王の娘ブリュンヒルト（その兄がアトリ）

——予言術に長（た）けた人物——

そのあとシングلزがライン河畔のグューキ王の宮廷にやって来るところでは、グンナル（グンター）の妹グズルーン（クリームヒルト、グートルーネ）が美しい鷹の夢を見て、やがて求婚してくる勇士が誰なのかを知るために、ブズリ王の娘ブリュンヒルト（その兄がアトリ）の館を訪ねることになっている。つ

まり、ブリュンヒルトはここでは予言術に長けていた人物として登場し、「グズルーンはシグルズと結婚するが、やがて彼を失い、アトリ（エッツェル）と再婚するものの、最後にはアトリを殺害する」という運命にあることを予言する。グズルーンは悲しい気持ちになってギューク王のもとに帰って行くが、この場面は『ニーベルンゲンの歌』でクリームヒルトが鷹の夢を見て、母后ウーデから将来の殿御を失うという不吉な占いを聞かされることを彷彿（ほうふつ）とさせる。いずれにしても北欧第一次伝承では、ブリュンヒルトは予言術に長けた人物として登場している。

ちなみに、ここで初めてブズリ王が出てくるが、『ヴォルスンガ・サガ』のその場面での説明によると、ブズリ王はギューク王にもまして強力であったが、両者ともにかく強力であったとされている。ブズリ王の息子がアトリ（エッツェル）で、ブリュンヒルトの兄であったとしているところも、この作品の特有な点である。

3. 策略によりグンナルの妻にさせられるブリュンヒルト

こうしてギューク王の宮廷にやって来たシグルズ（ジークフリート）は、その邪悪な王妃から忘れ薬を飲まされて、ブリュンヒルトのことを忘れ果ててしまうどころか、グンナルがそのブリュンヒルトへ求婚するのに手助けすることになる。このあたりはワーグナーおよび『ニーベルンゲンの歌』（ただし、この作品では忘れ薬は出てこない）と同じ展開であるが、『ヴォルスンガ・サガ』ではグンナルはシグルズとともにまずはブリュンヒルトの父ブズリと養い親ヘイミルを訪れたあとで、ブリュンヒルトの広間に出かけることになっている。その広間の周りには炎が燃えており、シグルズがグンナルと姿を交換してその炎を飛び越えて、その中の女性をグンナルの妻にするのは、先に紹介したブリュンヒルト伝説の原型と同じ展開である。

4. 嫉妬深いブリュンヒルト

こうしてブリュンヒルトはグンナルの妻となるが、『ヴォルスンガ・サガ』には省略されていて、『歌謡エッダ』中の「シグルズの短い歌」に特有なものとしてブリュンヒルトがたいへん嫉妬深い女性であることが挙げられる。その作品によると、シグルズがグンナルの妹である彼の妻グズルーンと一緒に、毎夜、ベッドに入って愛撫を交わす頃になると、ブリュンヒルトは悲しくなって、城を出て氷の張った野原と氷河をさまよったとされている。「喜びもなく、夫もなく、こうして歩き回る私。この苦しさ。胸も張り裂けそう」と、シグルズへの

愛とグズルーンへの嫉妬に苦しめられ、この嫉妬がシングルズ暗殺のきっかけとなる。ブリュンヒルトを何よりも大切に思ったグンナルが、弟グットルム（ヘグニは暗殺に反対する）を説き伏せて、シングルズを暗殺させてしまうのである。暗殺された夫シングルズのそばでグズルーンが悲鳴を上げると、ブリュンヒルトは一度心の底から笑うことになっている。そのときグンナルはブリュンヒルトを「災いの女よ」と呼んでいる。そのあとブリュンヒルトは自害して果てるが、いずれにしてもブリュンヒルトは、この作品では非常に気性の激しい女性として書かれている。『ヴォルスンガ・サガ』では確かにブリュンヒルトは心からシングルズ（ジークフリート）を愛していたことを告白する場面があるが、そこではこの『歌謡エッダ』の「シングルズの短い歌」ほど嫉妬深い女性ではない。その意味でこの『歌謡エッダ』の「シングルズの短い歌」は興味深い作品と言える。

5. 両王妃口論におけるブリュンヒルト——侮辱される王妃——

このようにブリュンヒルトの嫉妬がシングルズ（ジークフリート）暗殺の直接のきっかけとなる作品もあるが、たいていの作品においては両王妃口論がシングルズ（ジークフリート）暗殺のきっかけとなっている。『ヴォルスンガ・サガ』でもまさにそのとおりであり、ブリュンヒルトはグズルーン（クリームヒルト）と一緒に水浴びのためライン河へ出かけて、グズルーンより先に河の中に入ったことから口論となり、その口論の内容は夫自慢である。その夫自慢から、グズルーンが「竜を退治して、炎を飛び越えたのも、またブリュンヒルトのそばに寝て、腕輪を奪い取ったのも、私の夫シングルズです」と言って、その証拠に腕輪を見せることにまで発展して、この侮辱がシングルズ暗殺へと展開していくのである。ただ『ヴォルスンガ・サガ』ではシングルズ殺害のあと、ブリュンヒルトは真相を打ち明けて、シングルズが誠実を尽くしたことを口にするのと同時に、将来の出来事を予言してから、剣を胸に突き刺して自害して果てることになっている。

6. ブリュンヒルトの冥府への旅

『歌謡エッダ』中の「ブリュンヒルトの冥府への旅」では、ブリュンヒルトが自害して果てたのちのことが語られている。ブリュンヒルトは車の中に横たわったまま焼かれ、その車で冥府への道を走り、女巨人の館にやって来て、その女巨人との対話の中で自分の生涯と運命をかいつまんで語る。そこではブリュンヒルトのシングルズへの変わらぬ愛も明言されていて、北欧第一次伝承の特徴の一つとして貴重な作品と言える。

以上のとおり、北欧への第一次伝承でのブリュンヒルトの特徴は、彼女はワルキューレであり、さまざまな能力を身につけているとともに、予言術にも長けていて、未来を占う能力も備えている超人的な存在だと言えよう。他方では、竜退治の英雄シグルズに惚れ込んでいて、その妻グズルーンに異常なほどの嫉妬を見せる女性とも描かれている。また王妃としてひどく侮辱され、それが復讐へと発展していくが、その根底にはシグルズへの愛がある。最後に自害して果ててしまうのも、「ブリュンヒルトの冥府への旅」の記述からも明白のように、グンナルの妻となるよりは、あの世でシグルズと一緒にの方がよいという、シグルズへの変わらぬ愛があったとも言えよう。

以上が北欧第一次伝承におけるブリュンヒルト像の特徴である。

Ⅲ. 北欧への第二次伝承におけるブリュンヒルト像の特徴

——『ティードレクス・サガ』——

北欧への第二次伝承は、その後、ドイツにおいてさらに発展していった東ゴートのディートリヒ大王の説話が、ヴェストファーレンの町ゾーストを経由し、ニーダーザクセンのハンザ商人たちを介してノルウェーに伝えられて、その地で1250年頃大きな説話集にまとめられたものである。『ティードレクス・サガ』という作品⁹⁾がそれである。ティードレクとはディートリヒ大王のことであるが、もちろんこの説話集の中にはニーベルンゲン伝説も含まれている。この作品におけるブリュンヒルトの特徴は次のようにまとめられよう。

1. 馬の飼育場所有のブリュンヒルト

この作品ではブリュンヒルトはまず馬の飼育場を所有していて、そこに名馬グラーネがいることになっている。竜を退治して角質の身体となったジグルト（ジークフリート）は、鍛冶屋ミーメからその名馬グラーネのことを聞いていたので、そのブリュンヒルトの城に出かけるのである。ジグルトはブリュンヒルトから出迎えられるが、何者であるかを尋ねられても、答えることができず、逆にブリュンヒルトから自分の素姓を教えてもらう。ブリュンヒルトは彼に名馬グラーネを与えると、ジグルトはさらに旅を続ける。ワーグナーがこのあたりを素材の一部に用いていることは明らかである。

⁹⁾ Fine ERICHSEN(Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22.Band) Verlegt bei Eugen Diederichs in Jena 1924.

2. グンナルの妻となるブリュンヒルト

旅を続けてジグルトが辿り着いたのが、ニフルンゲン国で、その国王グンナルの妹グリームヒルトを妻にもらう。その結婚式の席上でジグルトはグンナルにゼーガルトのブリュンヒルトに求婚することを勧める。ジグルトは道を心得ているので、手助けするというのである。ところが、ブリュンヒルトの城に到着すると、ブリュンヒルトはグンナル王と同伴のティードレク王を丁重に出迎えるが、ジグルトはとても悪くあしらう。彼が今や一人の妻を持っていることを知っていたからである。この場面ではジグルトとブリュンヒルトが初めて会ったとき、二人はすでに婚約を誓っていたことになっているが、しかし、そういう記述は先の場面では見出されなかった。最初二人が出会った場面で編者が、それを書き落としたと考えるしかないが、いずれにしてもこの作品では至る所にこのような矛盾が読み取られる。とにかくジグルトとブリュンヒルトは婚約していたということが、当時よく知られていたと思われる。それでもジグルトはブリュンヒルトにグンナルとの結婚を勧め、誓いを破ったジグルトをなじるものの、最後にはティードレク王とグンナルも話し合いに加わり、ブリュンヒルトはグンナルとの結婚を承諾する。ここでは『ヴォルスンガ・サガ』のような炎を飛び越えるエピソードも見られない。また『ニーベルンゲンの歌』のように三種競技も出てこない。ただティードレク王の仲介によるもので、ティードレク王の威厳を讃えていると考えるべきであろうか。

こうしてとにかくブリュンヒルトはグンナルと結婚式を挙げるが、その夜、ブリュンヒルトはグンナルの愛撫を拒み、格闘の末、帯で彼の手と足を縛り上げて、彼を釘に吊るしてしまいうありさまである。二日目も三日目も同様であった。そこでグンナルはジグルトに相談すると、ジグルトは「処女である限り、ブリュンヒルトはものすごい力を発揮する」と説明する。グンナルはジグルトが誰にも漏らさないことを信じて、すべてを彼に委ねる。グンナルの了解を得たジグルトは、頭に頭巾をかぶって、ブリュンヒルトの寝床へ行き、彼女の処女を奪って、さらに彼女の手から指環を抜き取ってから、彼女をグンナルに引き渡す。この作品ではジグルトがグンナルの許可を得て、ブリュンヒルトの処女を奪い取っているのが特徴である。

3. 両王妃の口論におけるブリュンヒルト

こうしてグンナルとジグルトはともにニフルンゲン国のヴェルニツァ(ヴォルムスのこと)で平穏な生活を送っていたが、あるとき二人の王妃が口論して

しまう。この作品ではその口論は、王妃ブリュンヒルトが広間に入って行ったとき、グリームヒルトが立ちあがって礼をしなかったからである。グリームヒルトとしては自分の母のものであった座席をブリュンヒルトに渡したくないのである。このことから口論は激しくなり、ついにグリームヒルトはジグルトがブリュンヒルトの処女を奪い取ったとき、彼女の手から同様に奪い取った指環を証拠に見せて、彼女を侮辱する。ブリュンヒルトがこのような侮辱を受けたことから、あらすじはジグルト暗殺へと展開していく。暗殺の役目はヘグニ（ハーゲン）が引き受ける。森で暗殺されたジグルトの遺体が館に運び込まれると、グリームヒルトはひどく嘆くが、ブリュンヒルトは決して悲しむことはなかった。その後、グリームヒルトはズザートのアッティラ王と再婚して、ヘグニに対して最初の夫ジグルトの復讐をすることになる。このように見てくると、この作品は『ニーベルンゲンの歌』にかなり近づいていることが容易に理解できるよう。

以上、見てきたように、北欧第二次伝承の『ティードレクス・サガ』では北欧の主神オーディン（ヴォータン）は出てこないし、ブリュンヒルトも超人的な知力と力を持ち合わせているとは言うものの、普通の女性として登場し、第一次伝承の『歌謡エッダ』や『ヴォルスunga・サガ』に比べると、その存在感が軽くなっている。今やブリュンヒルトに代わって物語を動かしているのは、これまで存在感の少なかったグリームヒルトだと言ってもよいであろう。北欧への第一次伝承ではブリュンヒルトが重要視されて、さまざまな新しいエピソードが作られていったのに対して、北欧への第二次伝承ではブリュンヒルトに代わってグリームヒルトが表面に出てきている点、『ニーベルンゲンの歌』にかなり近い作品である。『ティードレクス・サガ』は、北方ドイツで新しく作られた説話がハンザ商人たちによって北欧に語り伝えられたもので、低地ドイツ的な内容を持つ作品と言えよう。

IV. ドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』におけるブリュンヒルト

5、6世紀にライン河畔フランクンの領土で歌謡のかたちで生まれたブリュンヒルト伝説は、こうして北欧へ伝承されてそれぞれの作品に作り変えられていったのであるが、もちろんこのブリュンヒルト伝説は北欧のみならず、南のドイツ・バイエルン地方へも、またさらには東方のドーナウ地方にも伝承されて、とりわけ現在のオーストリア地方では13世紀初頭にニーベルンゲン伝説の最高傑作とも言うべき作品が生まれる。『ニーベルンゲンの歌』と呼ばれてい

るドイツ中世英雄叙事詩¹⁰⁾がそれである。この作品では『ティードレクス・サガ』と同じように、ブリュンヒルトよりはクリームヒルトに重きが置かれて、ブリュンヒルトはもはや両王妃口論を展開させるためにのみ登場しているに過ぎない。『ニーベルンゲンの歌』におけるブリュンヒルトの特徴は次のようにまとめることができよう。

1. 女豪傑のイースラント女王としてのブリュンヒルト

『ニーベルンゲンの歌』ではブリュンヒルトはまず海の彼方(アイスランド)に君臨する女王として登場する。「彼女は限りなく美しく、その力もたいへん優れていて、彼女は愛を賭けて勇ましい英雄たちと槍を投げて競っていた。また石を遠くへ投げ、そのあとを追う幅跳びをも行い、彼女に想いを向けようとする者は、その三種競技で彼女に勝たねばならなかった。一種目でも負ければ、その者は首を失ったのである」(B326-327; C329-330)という女豪傑である。そのような女豪傑のブリュンヒルト女王にブルグント国のグンター王は求婚を思い立つが、グンター王は三種競技で彼女を打ち負かす自信はない。そこでグンター王はちょうどそのときブルグント国に滞在していたニーダーラントの英雄ジークフリートに助力を願い出る。ジークフリートはかつての冒険でニーベルンゲンの財宝を獲得していて、その中には「隠れ蓑」もあったので、それを被ると姿を消すこともできたからである。グンター王の妹クリームヒルトを妻にしたいと望んでいたジークフリートは、計画が成就した暁には妹を妻にもらうことを条件に、グンター王の手助けをすることになる。こうしてグンター王とジークフリートの間では契約が成立し、「ジークフリートはグンター王の家来である」ということにしてアイスランドへ出かけて、ブリュンヒルトとの三種競技に臨む。もちろん実際に三種競技を行うのは、隠れ蓑で身を隠したジークフリートである。5、6世紀の原型ではブリュンヒルトとの結婚の条件は、「城の周りの炎の壁を越えてやって来ること」で、その後の北欧伝承でもこの「炎を飛び越える」ことが条件とされていたが、『ニーベルンゲンの歌』では成立当時の13世紀初頭の騎士社会にふさわしく「石投げ、幅跳び、槍投げの三種競技」に変えられていることが理解できよう。『ニーベルンゲンの歌』ではブリュ

¹⁰⁾ Helmut de BOOR(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage Wiesbaden 1972. 相良守峯訳『ニーベルンゲンの歌』(全2冊) 岩波文庫 岩波書店 1955年 Ursula HENNIG(Hrsg.): Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1977. 石川栄作訳『ニーベルンゲンの歌』(全2冊) ちくま文庫 筑摩書房 2011年

ンヒルトは北のアイスランドに君臨する女豪傑の女王として登場し、結婚の条件を三種競技としているところが特徴である。

2. 気位の高い王妃としてのブリュンヒルト

こうしてブリュンヒルトは「隠れ蓑」を用いたジークフリートの策略によって三種競技に負けてグンター王の妃としてブルグント国にやって来るが、そこでは一貫して「気位の高い王妃」として描かれている。

グンター王とジークフリートとの契約に基づいてヴォルムスでは二組の結婚式が行われるが、ブリュンヒルトは家来であるはずのジークフリートがグンター王の妹クリームヒルトと結婚することに「王家としての侮辱」を感じて、事情が明らかにならないうちはグンター王の妻にはならないと言って、初夜のベッドの上ではグンター王の愛撫を拒むばかりか、グンター王を縛り上げて、壁の釘に吊るして、一晩中そのままにしておく。北欧第二次伝承の『ティードレクス・サガ』と同じ展開である。このようにひどい目にあったグンター王は、再度ジークフリートに手助けを求め、ジークフリートは再び隠れ蓑を用いて、今度はグンター王の姿に変身してブリュンヒルトをベッドの上で押さえつけてから、グンター王に引き渡した。北欧第二次伝承の『ティードレクス・サガ』と同じ展開であるが、一つ違う点は『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートはブリュンヒルトの処女を奪うことなく、グンター王に彼女を引き渡したという点である。ただジークフリートはそのときブリュンヒルトから指輪と帯を奪い取って、それをのちに妻クリームヒルトにあげてしまう。そのことがのちに災いの原因となるのである。

いずれにしてもこの作品ではブリュンヒルトは王妃という地位にこだわる「気位の高い王妃」として描かれているが、この気位の高い性格はグンター王の妻となったのちも引き続いて描かれている。つまり、結婚式のあと、ジークフリート夫妻は故郷のニーダーラントに帰って行くが、ブリュンヒルトは家来であるはずのジークフリートが十数年近く経っても一度も挨拶に来ないことに不満を抱くのである。そこでグンター王は饗宴への招待というかたちでジークフリート夫妻を呼び寄せるが、その饗宴の席で騎士たちの競技を見ていた折りに、ブリュンヒルトとクリームヒルトは互いの夫自慢から口論してしまう。5、6世紀の原型ではこの両王妃の口論はライン河の中で展開されたが、『ニーベルンゲンの歌』では13世紀の騎士社会に合わせて騎士たちの競技の折りとなされている。いずれにしても夫自慢に変わりはない。ただこの作品ではブリュンヒルトとクリームヒルトは明らかに対比的に描かれていて、ブリュンヒルトはあ

くまでも「王妃」という地位にこだわる気位の高い女性として描かれているのに対して、クリームヒルトは夫ジークフリートを心から愛する女性として描かれている。

これはグンター王とジークフリートの違いでもある。すなわち、グンター王は「女王」という地位にあるブリュンヒルトに求婚したが、ジークフリートはあくまでも一人の女性としてのクリームヒルトの愛を求めて、当時の「高きミンネ」の精神に則って求婚していく。「高きミンネ」とは身分の高い女性に寄せる愛のことで、その女性の愛にふさわしい存在となるためには騎士として修業を続けなければならない。「高きミンネ」は13世紀当時の騎士の教養として無くてはならないものとされた。ジークフリートはこの「高きミンネ」の精神に則ってクリームヒルトに求婚して、理想のかたちで結婚する。これに対してグンター王のブリュンヒルトへの求愛は、最初から他人の力を借りてのもので、「肉欲的」な求愛として描かれている。明らかに両者は対照的に描かれているのである。

この二人の夫たちの違いがそのまま王妃たちの違いともなっている。ブリュンヒルトは「王妃」という地位にこだわる女性で、あくまでもジークフリート夫妻を「家来」だとみなすが、それに対してクリームヒルトは心から夫ジークフリートを愛する女性として夫の優れた面を強調したに過ぎないのに、それがブリュンヒルトには「侮辱」だと思われて、二人の口論はますます激しくなっていくのである。クリームヒルトはとうとう耐えられなくなって、「結婚の晩、あなたを最初に愛したのは私の夫ジークフリートです」と言ってしまう。これは事実ではなく、嘘偽であるが、クリームヒルトは証拠の品として指輪と帯を見せてしまう。「指輪は盗まれていたもの」と言って、言い逃れることはできるが、しかし、帯はそういうわけにはいかない。帯まで証拠に見せつけられると、ブリュンヒルトはもはや何の反論もできずに、一人自分の部屋に閉じこもってしまう。この「王家の侮辱」をこのままにしておくことはできないと言って、それをうまく利用して、ジークフリート暗殺を企てたのが、ハーゲンである。ハーゲンはハーゲンでいずれは目の上のたんこぶのような存在であったジークフリートを暗殺しなければならないと考えていたのであり、また同時にジークフリートの所有していたニーベルングンの財宝をも狙っていたのである。こうしてハーゲンはこのブリュンヒルトの「侮辱」をうまく利用して、ジークフリートを暗殺してしまうのである。

以上のとおり、『ニーベルングンの歌』ではブリュンヒルトはクリームヒルト

と対比的に描かれた「気位の高い王妃」として登場し、その役割は両王妃口論を展開させるために登場しているに過ぎない。その証拠にブリュンヒルトはジークフリート暗殺後に自害して果てることもなく、クリームヒルトがフン族のエツェル王と結婚する後編においては、いつの間にか姿を消してしまって、あとはただ名前が挙げられるだけで、あらすじを動かす人物としてはまったく登場しない。『ニーベルンゲンの歌』ではクリームヒルトの方に重点が置かれていて、ブリュンヒルトは両王妃口論を引き起こすだけの脇役に過ぎないことが明らかである。北欧ではブリュンヒルトがますます重要視されていったのに対して、南のドイツ・オーストリアでは反対にクリームヒルトが主人公になっていることが容易に理解できよう。

V. 『ニーベルンゲンの歌』以後の作品

このドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の成立でもって5、6世紀以来のニーベルンゲン伝説も一応の定着を見たと言えるが、この作品成立以後もニーベルンゲン伝説はいろいろなかたちで伝承されていく。16世紀には韻文版『不死身のザイフリート』¹¹⁾が印刷本で発行され、1557年にはニュルンベルクの靴屋の親方ハンス・ザックスが悲劇『不死身のゾイフリート』¹²⁾を刊行し、さらに17、18世紀になると民衆本『不死身のジークフリート』¹³⁾も大量に印刷されて広く伝承されていく。ただこれらの作品での主人公はもっぱら竜退治のジークフリートであり、クリームヒルトはその竜に誘拐された乙女として登場するだけで、特に詳しく書かれている箇所もない。ブリュンヒルトになると、まったく名前すら読み取られない。

こうしてニーベルンゲン伝説は悪竜に誘拐された美女を救い出すためのジークフリートの冒険が語り継がれていくだけで、従来の古代ゲルマン的な悲劇性は感ぜられずに、やがてはだんだんと人々の脳裏から忘れ去られていく。

こうした状況下でニーベルンゲン伝説が再発見されるのは、18世紀後半以降

¹¹⁾ Wolfgang GOLTHER(Hrsg.): Das Lied vom Hürnen Seyfrid nach der Druckredaktion des 16.Jahrhunderts. Zweite Auflage. Verlag von Max Niemeyer, Halle a/S.1911 石川栄作編訳:『韻文版 不死身のザイフリート』ジークフリート伝説集 同学社 2014年

¹²⁾ Hans SACHS: Der hürnen Seufrid. Tragoedie in sieben Acten. Max Niemeyer, Halle a/S.1880. 石川栄作訳: ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』『九州ドイツ文学』第13号 1999年

¹³⁾ Wolfgang GOLTHER(Hrsg.): a.a.O. 石川栄作編訳:『民衆本 不死身のジークフリート』前掲書

のことで、その後、19世紀のドイツ・ロマン派の詩人たちがニーベルンゲン伝説を素材に用いて、さまざまな作品を作り上げていって、19世紀にはニーベルンゲン伝説は再び脚光を浴びることになる。ドイツ・ロマン派の詩人の中でも、ニーベルンゲン伝説の復活に多大の貢献をしたのは、グリム兄弟やルートヴィヒ・ティーク、そしてド・ラ・モット・フケーなどであるが、これらの作家たちは特に北欧のエッダ・サガを素材にしてそれぞれの作品¹⁴⁾を書いている。しかし、それらは北欧伝承の伝説を再現しているだけで、もちろんそれだけでも大いに価値はあるものの、ここで特に取り上げて紹介するほどの新しいニーベルンゲン伝説はない。その後、ニーベルンゲン伝説はドイツ・ロマン派の詩人たちだけではなく、多くの作家によって受容されていくが、たとえば、エルンスト・ラウパッハは1834年に戯曲『ニーベルンゲンの財宝』¹⁵⁾を出版するが、素材として最初の方には16世紀の韻文版『不死身のザイフリート』を用いているものの、主要部分では『ニーベルンゲンの歌』を用いていて、ブリュンヒルトに関してもほぼ『ニーベルンゲンの歌』と同じ設定であると考えてよいであろう。

VI. フリードリヒ・ヘッペルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作における

ブリュンヒルト

このようにニーベルンゲン伝説は19世紀に脚光を浴びるものの、北欧のエッダやサガおよび『ニーベルンゲンの歌』を素材に用いて、その再現を試みているだけで、とり立てて論ずる作品は少ないと言わなければならないが、特にブリュンヒルトの人物像について異彩を放つ作品を作り上げている作家としては、フリードリヒ・ヘッペルを挙げなければならないであろう。

ヘッペルは若い頃からニーベルンゲン伝説に魅了されていたが、1855年10月によりやくその伝説素材の戯曲化に着手して、紆余曲折を経たのち、5年後

¹⁴⁾ グリム兄弟の兄ヤーコブには『ニーベルンゲンの歌について』(1807年)をはじめとして、『ドイツ神話』(1863年)などがあり、弟ヴィルヘルムには『フォン・デア・ハーゲンによる刊行のニーベルンゲンの歌』(1808年)をはじめとして、『古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係』(1808年)や『ドイツ英雄伝説』(1829年)などがある。ルートヴィヒ・ティークには二つのロマンツェ『若きジークフリート』と『竜退治のジークフリート』(1804年)があり、ド・ラ・モット・フケーには戯曲『北欧の英雄』三部作(1810年)がある。

¹⁵⁾ Ernst RAUPACH: Der Nibelungen-Hort. Hofmann und Campe Hamburg 1834.

の1860年に第一部『不死身のジークフリート』、第二部『ジークフリートの死』および第三部『クリームヒルトの復讐』から成る悲劇『ニーベルンゲン』三部作¹⁶⁾を完成させる。この三部作の主な素材となったのは、『ニーベルンゲンの歌』であり、三部作全体のあらすじの展開はほぼ『ニーベルンゲンの歌』に同じと言ってもよいが、ただこの三部作の中でヘッベルは、ジークフリートとブリュンヒルトだけは「神話的時代」に属する人物として取り扱い、これに対してクリームヒルトやハーゲン「異教的時代」に属し、ディートリヒは「キリスト教的時代」に属する人物として登場させ、「神話的時代」と「異教的時代」と「キリスト教的時代」の3つの時代が衝突・対立しつつ、悲劇が展開しているところにヘッベルの特徴があると言うことができる。そのヘッベルにおけるブリュンヒルトの出自は次のようにまとめられよう。

まず北の果てに住むブリュンヒルトの出自についてヘッベルは、第二部『ジークフリートの死』の冒頭部分で、乳母フリッガがブリュンヒルト本人に語って聞かせることにしている。

乳母フリッガの語るところによると、イーゼンラントの女王が姫を産むと同時に息を引き取った日に、火の山の中から一人の老人が現れて、ルーネ文字を刻んだ板を添えてフリッガに一人の乳飲み子を預けたという。その乳飲み子はその後すくすくと育ち、その娘のすることが、ルーネ文字に予言されていたように、吉凶のしるしとなった。その娘が、すなわち、ブルンヒルト本人であり、故郷は神々の住むヘクラの山で、母がいるとしたらノルンやヴァルキューリエンの中にいるであろうと、乳母フリッガは語って聞かせるのである。ヘッベルにおけるブルンヒルトはこのように神々の子であるとされているところに特徴があると言えよう。

こうして乳母フリッガがブルンヒルトにその出自を語って聞かせているところに、グンター王がジークフリートに伴われて求婚に来て、『ニーベルンゲンの歌』と同じようなあらすじが展開されることになるが、このブルンヒルトの国にジークフリートは以前隠れ蓑を被って出かけて行ったことになっており、そのことは第一部『不死身のジークフリート』の中でジークフリート自らがグンター王らに語って聞かせることになっている。

¹⁶⁾ Friedrich Hebbel: Die Nibelungen. Ein deutsches Trauerspiel in drei Abteilungen. Reclam, Stuttgart 1974. ヘッベル(関口存男訳):『ニーベルンゲン』清華書院 1921 年(復刻 三修社 1994 年)

それによると、ジークフリートは父王の遺産をめぐって争っていた二人のニーベルングからその財宝を取り上げたあと、竜退治をしている折りに侏儒（こびと）アルベリヒに背後からしがみつかれてしまったが、侏儒の隠れ頭巾を脱がせてしまうと、侏儒は倒れてしまった。ジークフリートは侏儒を踏みつぶそうとしたが、竜の血に秘められた魔力のことを教えてもらったので、命だけは助けておいた。ジークフリートはこの侏儒の教えに従い、竜の血を浴びて不死身の肌の英雄となったのみならず、さらにその竜の血が舌に触れてから小鳥の言葉が理解できるようになったという。ジークフリートはその二羽の小鳥のあとを追いかけて行くと、炎の海が現れ、向こう岸には一つの城が見えた。ジークフリートは鳥の声に従って、バルムンクの剣を頭上で三度振り回すと、たちまち海は消え失せて、城壁の上に一人の気高い乙女が現れた。「あれが花嫁だ」と叫んだので、気がつくやうに、ジークフリートは侏儒アルベリヒの隠れ頭巾を被ったままだった。二羽の小鳥が隠れ頭巾を脱がせようとしたが、ジークフリートはそれを両手で押さえた。城壁の上の女性は美しかったが、ジークフリートの心を動かすまでには至らなかったもので、ジークフリートは挨拶をしない方がよいと思ったからだと言っている。以上のように、ベッベルの作品ではジークフリートはブルンヒルトの国に出かけたことはあるが、しかし、対面したことはなく、婚約を交わした仲でもなかったことを明らかにしているところにベッベルの特徴があると言える。ただこのジークフリートとブルンヒルトをヘッベルは、ほかの人物とは違って「神話時代」に属する人物だとしていることが理解できよう。その意味でも 19 世紀の作品の中にあって注目すべき作品であると言える。

以上のように、ベッベルの作品ではジークフリートはブルンヒルトの国に出かけたことはあるが、しかし、対面したことはなく、婚約を交わした仲でもなかったことを明らかにしているところにベッベルの特徴があると言える。ただこのジークフリートとブルンヒルトをヘッベルは、ほかの人物とは違って「神話時代」に属する人物だとしていることが理解できよう。その意味でも 19 世紀の作品の中にあって注目すべき作品であると言える。

Ⅶ. リヒャルト・ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作

上では 19 世紀のヘッベルを紹介したが、19 世紀の作品の中でもう一つ注目すべきは、何と言ってもヘッベルと同じ 1813 年に生まれたワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』四部作である。『ラインの黄金』¹⁷⁾『ワルキューレ』¹⁸⁾

¹⁷⁾ Richard Wagner: Das Rheingold. Reclam, Stuttgart 1979. ワーグナー（三光長治・高辻知義・三宅幸夫・山崎太郎編訳）：『ラインの黄金』白水社 1992 年

¹⁸⁾ Richard Wagner: Walküre. Reclam, Stuttgart 1979. ワーグナー（三光長治・高辻知義・三宅幸夫・山崎太郎編訳）：『ヴァルキューレ』白水社 1993 年

『ジークフリート』¹⁹⁾そして『神々の黄昏』²⁰⁾から成る四部作で、約26年の歳月を費やして1874年に完成、1876年にバイロイト祝祭劇場において初演されたワーグナーのライフワークとも言うべき作品である。ワーグナーはヘッベルが悲劇『ニーベルンゲン』三部作を書いているのとちょうど同じ頃に、同じニーベルンゲン伝説を素材にした四部作のオペラ作品を作っていたということは、驚くべきことである。それほどに当時はニーベルンゲン伝説が芸術家たちの心を捉えていたことの証左と言える。ただヘッベルが主に『ニーベルンゲンの歌』を素材に用いたのに対して、ワーグナーは『ニーベルンゲンの歌』とともにとりわけ主な素材として北欧のエッダ・サガを用いている点が特徴で、その結果、北欧的な要素が色濃くなっていることは当然のことである。それはブリュンヒルデについてもあてはまる。ワーグナーにおけるブリュンヒルデ像の特徴を次のようにまとめることができよう。

1. ワルキューレとしてのブリュンヒルデ

5、6世紀にライン河畔フランケン領土で生まれたブリュンヒルト伝説が、その後、北欧に伝承されて北欧神話と結び付けられて、ブリュンヒルトがワルキューレとなったことは、北欧第一次伝承の『歌謡エッダ』や『ヴォルスunga・サガ』においても読み取られるが、そこではブリュンヒルトは北欧の主神オーディンの娘であったか否かについては、何の記述もなかった。そこをワーグナーははっきりとさせて、ブリュンヒルデを『ワルキューレ』第二幕において初めて主神ヴォータンと知恵の女神エルダの間に生まれた愛娘（まなむすめ）として登場させている。まずはヴォータンの愛娘で、ヴォータンの意志に従って倒れた英雄たちの魂をワルハラ城に運ぶワルキューレとして登場しているところに、ワーグナーにおけるブリュンヒルデの第一の特徴がある。

『ワルキューレ』第二幕で展開される双子の兄ジークムントとフンディングの決闘でも、ブリュンヒルデはワルキューレとして父ヴォータンの命令に従ってジークムントに勝利を与えるつもりだった。ところが、ヴォータンは正妻で結婚の女神であるフリッカに説き伏せられて、最初の命令を撤回して、フンディングに勝利を与えるよう、ブリュンヒルデに命令する。しかし、ブリュンヒ

¹⁹⁾ Richard Wagner: Siegfried. Reclam, Stuttgart 1979. ワーグナー（三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳）：『ジークフリート』白水社1994年

²⁰⁾ Richard Wagner: Götterdämmerung. Reclam, Stuttgart 1979. ワーグナー（三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳）：『神々の黄昏』白水社1996年

ルデは双子の兄妹の愛を直接目にするとともに、父ヴォータンの心の奥底をも推（お）し量（はか）って、決闘の場ではジークムントに味方することを決意する。結果的には、その決闘にヴォータンが介入してきて、ジークムントは倒れてしまうものの、ブリュンヒルデはジークムントの折れた剣の破片とともにジークリンデを連れて逃げ去る。この父の命令違反を起こしたことで、のちにヴォータンから罰として永遠の眠りにつかされることは、北欧第一次伝承の『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』と同じである。ワルキューレとしてのブリュンヒルデ像を造形するにあたって、ワーグナーが北欧第一次伝承を参照したことは、明らかである。

2. ジークフリートの名付け親としてのブリュンヒルデ

こうしてワーグナーはブリュンヒルデ像を造形する際に北欧第一次伝承の素材を用いたのであるが、しかし、双子の妹ジークリンデが胎内に宿している男の子にジークフリートという名前を授けることにしたのは、ワーグナーの創作であり、またすばらしい着想と言える。ブリュンヒルデ第二の特徴である。その場面は次のとおりである。

Brünnhilde

Fort denn eile,
nach Osten gewandt!
Mutigen Trotzes
ertrag alle Müh'n,
Hunger und Durst,
Dorn und Gestein;
lache, ob Not,
ob Leiden dich nagt!
Denn eines wiss'
und wahr' es immer:
den hehrsten Helden der Welt
hegst du, o Weib,
im schirmenden Schoß!

ブリュンヒルデ

（ジークリンデに方向を示しながら）

東へ向かって、
早く逃げなさい！
勇気を出して
あらゆる苦難に耐えなさい。
空腹も喉の渇きも、
いばらの道も岩道も。
悲しみと苦しみさいなまれても、
ほほえみなさい！
ただ一つのことだけは知っていて、
いつも心に留めておきなさい。
この世で最も気高い英雄を
あなたはそのやさしい胎内に
抱いているということをし！
（彼女は鎧の下からジークムントの剣の
破片を取り出して、それをジークリンデ

Verwehr ihm die starken	に渡す)
Schwertesstücken;	丈夫な剣の破片をその子のために
seines Vaters Walstatt	大切にしまっておきなさい!
entführt'ich sie glücklich:	その子の父の戦場から
der neugefügt	私はこれを無事に取って来たのです。
das Schwert einst schwingt,	この破片から剣を鑄(い) なおして、
den Namen nehm er von mir——	いつかそれを振り上げる人の名を、
>>Siegfried<< erfreu sich des Siegs!	私が名づけてあげましょう。
	勝利を喜ぶ英雄「ジークフリート」です!

Sieglinde

O hegrstes Wunder!
 Herrlichste Maid!
 Dir Treuen dank ich
 heiligen Trost!
 Für ihn, den wir liebten,
 rett ich das Liebste:
 meines Dankes Lohn
 lache dir einst!
 Lebe wohl!
 Dich segnet Sieglinde's Weh!

ジークリンデ (大きな感動のうちに)

ああ、いと高貴なる奇蹟よ!
 いと輝かしき乙女よ!
 聖なる慰めを与えてくれた
 誠実なあなたに私は感謝します!
 私たちが愛した彼のために、
 私は最愛の子供を救い出します。
 私の感謝の報いが
 いつかあなたにほほえみますよう!
 さようなら! ジークリンデの
 陣痛があなたを祝福しますよう!
 (彼女はそこから前景の右手の方に急いで去る)

ブリュンヒルデがジークフリートと名付ける場面で奏でられるのが、「ジークフリートのライトモチーフ」というもので、ジークリンデが「ああ、いと高貴なる奇蹟よ」と叫ぶ場面で奏でられるのが「愛による救済のモチーフ」というもので、四部作最後の『神々の黄昏』の最終場面でたいへん重要になってくる。特に「愛による救済のモチーフ」は、この場面と『神々の黄昏』の最終場面の2か所でしか用いられておらず、ワーグナーは最後まで大切に取っておいたメロディなのである。ワーグナーはブリュンヒルデをジークフリートの名付け親としているだけでなく、この場面でジークリンデと結び付けることによって四部作全体の結末部分を決定づける重要な人物として造形していることが理解できよう。

3. 父ヴォータンから眠りの罰を受けるブリュンヒルデ

こうしてブリュンヒルデはジークリンデを逃がしてやることで、父ヴォータンの命令に背いた罰として永遠の眠りにつかされることになるが、これは北欧第一次伝承の『ヴォルスンガ・サガ』に基づいている。ただ素材では数行で説明されていたことをワーグナーは詳しく、しかもたいへん感動的に展開している。簡単な説明にとどまっていた素材のエピソードを敷衍（ふえん）して感動のオペラにしているところがワーグナーの魅力であり、また偉大なところでもある。

『ワルキューレ』第三幕第3場のブリュンヒルデの台詞（セリフ）「私が犯したことは、私の罪をあなたがこんなに恥ずかしいほどに罰するような、恥ずかしいことだったのでしょくか」から始まり、永遠の眠りにつかされる部分を説明しておく、父ヴォータンは最初ブリュンヒルデを長い眠りにつかせて、そこを通りかかった男の餌食となるのだという罰を与えようとするが、それではブリュンヒルデにはみじめなことなので、彼女は真に勇敢な英雄だけが自分をわがものとすることができるように、自分の眠る周りに炎を燃え上がらせてほしいと願い出る。父ヴォータンは父の命令に背いたとはいえ、愛娘の願いだから、その願いを叶えて、ブリュンヒルデを眠らせたあとで、火の神ロークに語りかけて、ブリュンヒルデの周りに炎を燃え上がらせる。父娘の愛情がひしひしと伝わってくる場面で、『ワルキューレ』第三幕の中でも圧巻である。とりわけ「真に勇敢な英雄」という言葉のところで「ジークフリートのライトモチーフ」が奏でられて、この場面でブリュンヒルデとジークフリートが愛で結ばれることがほのめかされており、これまでの伝承では見られなかったワーグナーの独創的な部分で、その意味でも重要な場面である。

4. 目覚めのブリュンヒルデ

こうしてブリュンヒルデは長い眠りにつかされるが、彼女を目覚めさせるのは、彼女の願いどおり、真に勇敢な英雄ジークフリートである。逃げのびた森の中で双子の妹ジークリンデは男の子（ジークフリート）を産むと同時に死んでしまうが、その幼子は鍛冶屋ミーメのもとで逞しい若者に成長し、父ジークムントの折れた剣の破片から自らが鍛え直した剣ノートゥングでもって竜ファフナーを倒したあと、小鳥の案内でブリュンヒルデの眠る岩山へ出かけて、そこでブリュンヒルデを目覚めさせる。とても感動的な場面である。

長い眠りから目覚めたブリュンヒルデが大地や昼間や神々に祝福を送る場面

は、『ヴォルスンガ・サガ』には見出されないが、『歌謡エッダ』の「シグルドリーヴァの歌」（シグルドリーヴァとはブリュンヒルトのこと）において読み取られることを考慮に入れると、ワーグナーはこの場面でそれを素材に使用したと推定される。しかし、引用テキストの最後のように、ジークフリートがブリュンヒルデの話を聞いているうちに、彼女を一瞬母親だと錯覚してしまうふうにもっていつているところは、ワーグナーの独創的な部分である。ワーグナーにおいてブリュンヒルデはジークフリートにとっては叔母であり、妻でもあるが、同時にこの場面のように母親と考えてよいかもしれない。ブリュンヒルデがこのようにジークフリートに対して母性的な愛を抱いているところもワーグナーの特徴の一つと言えよう。

5. ジークフリートの求愛を受け入れるブリュンヒルデ

こうしてブリュンヒルデは宿命的に真に勇敢な男によって生に目覚めさせられるとともに、ジークフリートは初めて異性への愛に目覚めるが、ブリュンヒルデはこれまでワルキューレの時代に身に着けていた鎧や兜が地面に落ちているのを目にして、未来に不安を覚える。その不安をブリュンヒルデがジークフリートに訴える場面は、『ジークフリート』第三幕第3場の中でも白眉と言ってよいだろう。ワーグナーが妻コジマの誕生日にプレゼントしたと言われる「ジークフリートの牧歌」のメロディが使われている場面である。

このようにブリュンヒルデはこれから人間の女性としてジークフリートの愛を受け入れるにあたって不安を覚える。こういう愛への不安を覚えるブリュンヒルデはワーグナー特有のものと言えよう。不安を訴えて、ブリュンヒルデはジークフリートの愛を退けようとするが、しかし、ジークフリートの激しい求愛に負けてしまい、その愛を受け入れて、神々の世界に別れを告げて、人間の女性として愛に生きる決意をする。そのときのブリュンヒルデとジークフリートの愛の二重唱も文句なしに『ジークフリート』第三幕の中でも圧巻であり、「すばらしい」の一言に尽きる最も感動的な場面である。5、6世紀にニーベルンゲン伝説が生まれてから、ワーグナーによって初めてジークフリートとブリュンヒルデの愛が高らかに歌い上げられたと言える。素材の『ヴォルスンガ・サガ』では数行でしか語られていなかった二人の愛を敷衍して展開させているところが、ワーグナーの功績である。

6. 夫を冒険の旅に送り出すブリュンヒルデ

こうして愛で結ばれた二人であるが、英雄たる者は常に冒険の旅を続けなけ

ればならないので、ブリュンヒルデは愛するジークフリートに旅立ちを許す。この場面でブリュンヒルデは神々が自分に教えてくれたものをジークフリートにすべて与えたと言い、「もはや与えることのできないあわれな自分をさげすまないでください」と頼んだりするが、この場面は、『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』の至るところで、神の身分であるブリュンヒルトがシングルズにさまざまなことを教え諭していくことを前提にしていると思われる。知識豊かなブリュンヒルデをワーグナーは『神々の黄昏』の序幕に織り込んでいることが理解できよう。素材のエッダやサガではこの二人の別れの場面はただ一言「シングルズはブリュンヒルトのもとを去って行った」と語られているだけであるが、ワーグナーはそれを敷衍してすばらしい場面に行っている。ワーグナーの独創的な場面と言ってよいだろう。

7. 裏切られるブリュンヒルデ

こうしてジークフリートはブリュンヒルデのもとを去ってグンターの館にやって来るが、ジークフリートとブリュンヒルデの愛はその悪漢ハーゲンの策略の餌食(えじき)となる。ハーゲンの策略により忘れ薬を飲まされたジークフリートは、ブリュンヒルデのことを忘れてしまい、目の前にいるグンターの妹グートルーネに惚れてしまう。グートルーネと結婚したいためにジークフリートは、グンターがブリュンヒルデに求婚するのに、隠れ頭巾を使って手助けをすることになる。『ヴォルスンガ・サガ』と同じ展開であり、『ニーベルングンの歌』で言えば、三種競技をする場面に相当するが、ワーグナーは『ヴォルスンガ・サガ』の場面を敷衍してワーグナー独自の展開としている。ワーグナーは素材を用いながらも、そのまま再現するのではなく、ワーグナー独自のものにしているところが魅力であり、また偉大なところでもある。

8. 頭が混乱した状態のブリュンヒルデ

ハーゲンの策略に操られたジークフリートの手助けによってグンターは、花嫁ブリュンヒルデを伴って館に戻るが、花嫁は青ざめた顔を伏せたままである。ジークフリートがグートルーネを伴ってそこへやって来て、グンターからその名前が叫ばれたとき、ブリュンヒルデは驚いて初めて目を上げる。目の前にジークフリートの姿を認め、彼がグンターの妹グートルーネと結婚することを耳にすると、ブリュンヒルデはよろめいて倒れそうになる。彼女はジークフリートが自分のことを知らないようなので、ひどく心を乱している。やがてジークフリートの指に指環を見つけたときには、さらに頭が混乱してくる。この指環

はグンターが求婚に来たときに強引に奪い取ったはずのものだからである。ジークフリートに尋ねても、またグンターに尋ねても、きちんとした納得のゆく返事が返ってこないのが、ブリュンヒルデは欺きを察して、「私からこの指環をもぎ取ったのは、欺き盗人ジークフリートだったのです」と叫んで、ジークフリートを責める。これに対してジークフリートは、「この指環は女から手に入れたものではない。……かつて強い竜を倒したとき、洞穴の前で勝ち得たものなのだ」と答える。

この場面でジークフリートは、前日の岩山での自分の行動を忘れ果てているのだろうか。ジークフリートは岩山でのことが首尾よくいったことをハーゲンとグートルーネに報告していることから、それを忘れているとは考えられない。とすれば、ジークフリートはそのときとっさに機転をきかせて、遠い昔のことを語って、その場をうまく言い逃れようとしているのだろうか。あるいは前日の出来事のうち指環を奪い取った瞬間だけは、特殊な忘れ薬のために記憶に残っていないのだろうか。いずれにしても不可解な場面と言わざるを得ない。

この場面については講談社学術文庫の拙著『ジークフリート伝説』²¹⁾の中ですでに私見を述べたが、それを引用すれば、この場面は『ニーベルンゲン歌』においてジークフリートがグンターの姿でブリュンヒルトを押さえつける場面(B665-82)の裏返しではないかということである。ワーグナーが『ニーベルンゲンの歌』の展開を裏返しのかたちで取り入れていることは、多くの箇所でも認められるが、この場面もその裏返しの展開の一つである。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』ではブリュンヒルトは指環を抜き取られたことにはまったく気がつかなかった(B679)が、ワーグナーはその裏返しのかたちでジークフリートの方がたちまち指環のことを忘れてしまったとしているのである。『神々の黄昏』第二幕第1場でアルベリヒが語っているように、ジークフリートは「指環の価値を一切知らず、その羨(うらや)ましい力を全然利用しない」のであり、指環にはまったく関心がないのである。この場面でもジークフリートは無意識のうちに指環を自分の指に嵌(は)めていたのである。それをブリュンヒルデに見つけられて詰問されたとき、彼は本能的に竜退治でそれを獲得したことを思い出したのである。しかし、ジークフリートが忘れ薬のために自分のことを忘れ果てていることを知らないブリュンヒルデは、裏切られたと思って、「皆さん、聞いてください。私は彼(グンター)ではなく、あそこの人(ジークフリート)と結

²¹⁾ 石川栄作：ジークフリート伝説——ワーグナー『指環』の源流 講談社学術文庫 講談社 2004年 242-243 ページ参照。

婚したのです。・・・彼が私から悦びと愛を奪い取ったのです」と打ち明ける。ジークフリートが洞穴の前で指環を勝ち得たという話が偽りでなかったように、このブリュンヒルデの言葉も、長い眠りのあと二人は愛で結ばれたという限りにおいては、決して偽りではない。しかし、これが前日の出来事として語られているなら、ショッキングな言葉である。ジークフリートは自らの潔白を証明するために、「抜き身の剣が二人の間に置かれていた」ことを持ち出すが、それに対してブリュンヒルデは「剣は鞘に収まって、壁にかかっていた」と言う。このブリュンヒルデの言葉も初めて二人が愛で結ばれた時のことだとすれば、嘘偽りではないが、前日のことだとすると、衝撃的な言葉である。追い詰められたジークフリートは、ハーゲンの差し出す槍の穂先に指をあててグンターとの誓いを破っていないことを誓えば、ブリュンヒルデも同様に「この男は誓いをすべて破り、今も偽りの誓いを立てたのだから、この槍の穂先が彼を傷つけるように！」と誓いを立てる。のちにジークフリートがこのハーゲンの槍で突き刺されてしまうことを考えると、ジークフリートはやはりグンターとの「兄弟の契り」を破ったのであろうか。真相は謎に包まれているが、私見によれば、ジークフリートは兄弟の誓いを破ってはいない。といって、ブリュンヒルデもまったくでたらめな作り話をしているのでもない。二人の間には目覚めのあとの愛の生活とグンター求婚の時期とが互いに交錯しているだけである。このような紛糾に陥ったのも、すべてはハーゲンの策略による忘れ薬の魔力によるものである。この場面でブリュンヒルデの頭はまったく混乱していると言ってもよいであろう。そのブリュンヒルデの心が動揺しているのをうまく捉えて、ハーゲンはブリュンヒルデに復讐を唆すのである。『ヴォルスンガ・サガ』においてブリュンヒルトが嘘について夫グンナルにシグルズ暗殺を唆す場面で、ワーグナーはこのように紛糾に巻き込まれたブリュンヒルデを描くことによって、ブリュンヒルデの内面を深く掘り下げることに成功していると言えよう。楽劇を見る観客をも紛糾に陥らせるような効果のあるすばらしい展開であると言える。

9. 両王妃口論におけるブリュンヒルデ

従来の伝承では、主人公ジークフリートの暗殺のきっかけとなるのは、両王妃口論であったが、上で述べたように、ワーグナーではブリュンヒルデの指に嵌まっていた指環が紛糾の原因となっていて、両王妃口論は一見削除されたかのように思われる。しかし、そのあとの展開を見ると、『神々の黄昏』の中にもきちんと両王妃口論が織り込まれているのである。

それは、ジークフリートが暗殺されて、その遺体が館に運び込まれたとき、ラインの乙女たちから真相を聞き知って理性を取り戻していたブリュンヒルデがグートルーネの前に進み出る場面である。ブリュンヒルデとグートルーネの台詞（セリフ）は次のようになっている。

Gutrune

Brünnhilde! Neiderboste!
Du brachtest uns diese Not:
die du die Männer ihm verhetztest
weh, daß du dem Haus genaht!

グートルーネ（床から激しく跳び起きて）

ブリュンヒルデ！恨みに燃える女！
この災いをあなたがもたらし、
あなたが兄弟たちを彼にけしかけた。
あなたがこの館に来たのが、災いだ！

Brünnhilde

Armselige, schweig!
Sein Eheweib warst du nie,
als Buhlerin
bandest du ihn.
Sein Mannesgemahl bin ich,
der ewige Eide er schwur,
eh Siegfried je dich ersah.

ブリュンヒルデ

あわれな女性よ、黙るのです！
あなたは決して彼の妻ではなかった。
情婦として
あなたは彼を縛り付けただけのこと。
彼の本当の妻はこの私です。
ジークフリートはあなたに会う前に、
この私に永遠の誓いを立てていた
のです。

『ニーベルンゲンの歌』ではブリュンヒルトがクリームヒルトから「ジークフリートの側女（そばめ）」だと罵られて、ひどい恥辱を受けるのであるが、このワーグナーではブリュンヒルデが堂々と誇らしげに「ジークフリートの本当の妻はこの私です」と言っている。この点でもワーグナーの展開は『ニーベルンゲンの歌』と裏返しのある関係にあると言える。ワーグナーはこのように従来のニーベルンゲン伝説の中のエピソードをできるだけ多く自分の作品の中に取り入れている、しかも従来とは違ったかたちで取り入れていることが理解できよう。

10. 自己犠牲のブリュンヒルデ

『神々の黄昏』第二幕ではかなり取り乱していたブリュンヒルデは、第三幕になると、このようにラインの乙女たちから真相を聞き知って、また知識を取り戻して、皆の前に姿を現し、ジークフリートの遺体を前にして、ジークフリ

ートの潔白を打ち明け、天に向かって、「すべての罪は神々にある」ことを口にする。ここではブリュンヒルデは審判者のようなかたちで登場していると言ってもよいであろう。

この最終場面におけるブリュンヒルデの殉死には、一体、どういう意味が盛り込まれているのであろうか。炎の中に身を投じるブリュンヒルデの行為は、『ヴォルスンガ・サガ』に由来するが、ワーグナーの作品ではこのブリュンヒルデの行為の中に「権力に対する愛の勝利」がほのめかされていると言ってもよいであろう。楽劇『ニーベルングの指環』四部作全体は、ラインの黄金から作ったニーベルングの指環をめぐる、神々、侏儒（こびと）、巨人、人間が相争い、ともに滅びていく物語であるが、その根底には「権力」と「愛」の対立がある。指環はアルベリヒやヴォータン、ハーゲンなどの男たちにとっては「権力」の象徴であるが、ジークフリートとブリュンヒルデにとっては「愛」の象徴である。この「権力」と「愛」が対立しながら物語が展開されていくが、しかし、ジークフリートとブリュンヒルデの「愛」は権力志向の男たちの餌食となる。ジークフリートは暗殺されてしまうが、しかし、ブリュンヒルデはジークフリートの遺体を焼く炎の中に身を投げることで永遠の愛を勝ち得たと言える。すなわち、ジークフリートが岩山の周りに燃え上がる炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデもまた今やこの最終場面で気高き英雄の亡骸を焼き尽くそうと燃え盛る炎の中へ飛び込んで殉死することによって、ジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。赤々と燃え盛る炎は二人の愛の炎であると解釈することもできる。二人の愛の炎はやがてギービヒ家の館から天上の神々のワルハラ城にも燃え移って、まさに神々は黄昏を迎えようとしている。ジークフリートの死はこうして神々の没落をもたらすが、しかし、ジークフリートとブリュンヒルデの愛によってその廢墟の中からはやがて愛する人間の支配する新しい世界が生まれてくることがほのめかされているのである。ヴォータンやアルベリヒおよびハーゲンの「権力」は滅び去り、ジークフリートとブリュンヒルデの「死による愛」が勝利を収めたのである。

このようにニーベルンゲン伝説における「ジークフリートの死」が北欧神話の「神々の黄昏」と二重重ねになって物語が展開され、最後には神々の「権力」の世界に代わって人間の「愛」の世界が到来することがほのめかされているところにワーグナーの魅力がある。ブリュンヒルデに関して言えば、勇ましく戦うワルキューレから愛する人間女性へと変貌を遂げているのであり、北欧のエッダ・サガにおいてとは比べ物にならないくらい、ブリュンヒルデの内面が深く掘り下げられているところにワーグナーの大きな魅力がある。ブリュンヒル

デ像はワーグナーによって初めて多様になり、内面化されて、さらには未来の「愛」の世界を築き上げることのできる女性の象徴となっていると言えよう。

VIII. ウーリー・エデル監督の映画『ニーベルンゲンの指環』

こうしてワーグナーによってブリュンヒルデは奥行きのある深い人物となって、その後もいろいろな作品で取り扱われることになり、20世紀に入り、映画が誕生すると、1924年にはフリッツ・ラング監督によって映画化²²⁾される。そこではブリュンヒルトはアイスランドの女王として登場し、だいたい『ニーベルンゲンの歌』と同じ設定である。ただ彼女は竜退治の英雄ジークフリートに恋する女王として強調されているところが特徴である。すなわち、彼女は隠れ頭巾を被ったジークフリートとの三種競技に負けて、グンター王の妻となるが、のちにクリームヒルトとの口論でひどい恥辱を被ったことからジークフリート暗殺を要求するものの、暗殺後にはジークフリートを暗殺に迫りやった悔恨の念から自害して果てるのである。最終場面では彼女は竜退治の英雄ジークフリートと運命的に結び付けられる北歐的な悲劇の女性として描かれていると言えよう。

その後、21世紀に入って最近の映画としては、ウーリー・エデル監督によって映画化される。映画『ニーベルンゲンの指環』（ドイツ／アメリカ 2004年）²³⁾がそれである。最後にこの映画におけるブリュンヒルデを紹介しておこう。

この映画は、題名からも想像できるように、ワーグナーのオペラが大きな影響を与えている。しかし、全体的には『ニーベルンゲンの歌』のあらすじに従って展開している点も多く確認され、二つの作品を混ぜ合わせて、一つの新しい物語に仕上げていると言えよう。

まずブリュンヒルデは『ニーベルンゲンの歌』と同じようにアイスランドの女王として登場し、決闘で自分に勝った者だけと結婚すると誓っていたが、これまで彼女に勝った男はいないという女豪傑である。しかし、この映画ではその彼女の強さは北歐の神々から授かったものだとされている。

この相手役のジークフリートも『ニーベルンゲンの歌』のようにクサンテンの王子として登場するが、ブリュンヒルデとの出会いは北歐神話的な要素が強

²²⁾ フリッツ・ラング監督の映画第一部『ジークフリートの死』、第二部『クリームヒルトの復讐』（1924年ドイツ）ビデオとDVDがある。

²³⁾ ウーリー・エデル監督の映画『ニーベルンゲンの指環』（ドイツ／アメリカ 2004年）DVDがある。

くなっている。すなわち、ブリュンヒルデは、北欧の主神オーディン（ヴォータン）のパワーが込められているルーネ文字のお告げがあって、「近いうちに空から炎が降りてきて、そのあとあなたと同じくらい強い男が現れて、その男が闘いであなたを倒すだろう」という占いを、そばに仕えている占い師ハルベラから受ける。このような占いを受けたとき、ブリュンヒルデはライン河を船に乗って旅していたが、そのライン河畔で一人の鍛冶職人が水を汲んでいるのを目にする。実はその鍛冶職人がクサンテンの王子ジークフリートなのであるが、彼は、幼い頃、クサンテンの城がザクセン勢に襲われ、孤児として鍛冶屋エイヴィンに拾われて、記憶を失ったまま、エリックという名前で養育されて、ようやく逞しい若者に成長したのであった。

こうして二人が初めて互いに姿を目にしたその夜のことで、ブリュンヒルデの一行がライン河畔でキャンプを張っていると、空から炎が落ちてきたので、ブリュンヒルデは馬に乗って、その場所に急ぐ。一方、鍛冶職人ジークフリートもその炎が落ちた場所に走って行っていたので、二人はそこで決闘となる。剣を抜いての闘いののち、ジークフリートが相手を倒して、マントを脱がしてみると、女性であることに気づく。決闘に負けたブリュンヒルデは、「私は初めて負けた。お前は強い。お前と私は出会う運命であった」と言ってから、二人は愛し合う。抱擁のあと、ジークフリートは「一緒に暮らそう」と言い出すが、それに対してブリュンヒルデは「お前と同様私にも務めがある。女王としてアイスランドで待つことにしよう」と答えてから、二人は永遠の愛を誓い合って別れる。この出来事は夢だったのか、現実だったのか、その場で目覚めたジークフリートは、不思議に思う。目覚めたとき、すでにブリュンヒルデの姿は確かになかったが、しかし、天から炎が落ちてきた跡はそのまま残っていた。

こうしてアイスランドに帰って行ったブリュンヒルデは、家臣たちの前で「女王の自分が嫁ぐのは、決闘で自分に勝った男だけだ」と言って、自分に打ち勝つのはただ一人ジークフリートだけだと信じて、彼が求婚に来るのを待ち受ける。しかし、「心ではとても近く感じるが、実際の距離はとても遠い。あとどれくらい待てば会えるのか」と、待ち遠しく思いながら、ひたすら待つだけの日々を過ごすのである。

一方、ジークフリートの方は養父の鍛冶屋エイヴィンに伴われて注文の剣を届けにブルグント国のグンター王のもとに行くが、そこで竜退治をしたあと、ザクセン勢の二人の国王兄弟と戦っている最中に、記憶を取り戻し、クサンテンの王子であると名乗る。これでアイスランドの女王ブリュンヒルデに求婚する機会がめぐってきたと言えるが、しかし、グンター王の異父兄弟ハーゲンか

ら忘れ薬を飲まされて、ブリュンヒルデに誓った愛のことを忘れて、たちまち目の前にいるグンター王の妹クリームヒルトに恋してしまう。クリームヒルトを妻にするために、ジークフリートはグンター王がアイスランドのブリュンヒルトへ求婚するのに手助けをしてアイスランドへ行く。

ブリュンヒルデはついにジークフリートが求婚のためにやって来たと思うが、しかし、求婚に来たのはグンター王で、ジークフリートはその家来に過ぎないと言う。こうしてブリュンヒルデは隠れ頭巾でグンターの姿をしたジークフリートと両刃（もろは）の斧で闘うが、負けてしまい、しぶしぶグンター王の妻としてブルグントの国へ嫁いで行く。

しかし、ブリュンヒルデは初夜のベッドの上でグンター王の愛撫を拒んだので、グンター王は再度ジークフリートに手助けを頼む。仕方なく引き受けたジークフリートは、再度隠れ頭巾を使ってグンターの姿でブリュンヒルデをベッドの上で押さえつけ、彼女からベルトを奪い取る。ブリュンヒルデの神々から授けられた強い力は、そのベルトに込められていたので、ベルトを奪い取られると、ただの女性でしかない。こうして彼女はその策略によってグンター王の妻となるのである。

ところが、ジークフリートがそのベルトを手にして戻って来たところをクリームヒルトに見つけられてしまい、ジークフリートはすべての秘密をクリームヒルトに話してしまう。翌日、大聖堂の前でどちらが先にその中に入るかをめぐって両王妃の間で口論となったとき、ブリュンヒルデはクリームヒルトからベルトを見せつけられて、ひどい恥辱を受けて、それが、悪漢ハーゲンの企みなどもあって、ジークフリートへの暗殺へと発展していく。

ジークフリートはハーゲンの策略で狩りに出かけた森の中で暗殺されて、その遺体が館に運ばれたとき、クリームヒルトが持っていたジークフリートの指環をめぐって、グンター王とハーゲンが兄弟喧嘩をしてしまい、グンター王はあえなく最期を遂げる。男たちが狩りに出かけたあとで、クリームヒルトからベルトを返されて、すべての真実を知ったブリュンヒルデは、そのベルトを締めて、神々から授けられた強い力を取り戻して、ハーゲンと闘い、彼の首を刎ねてしまう。やがて舟に乗せられたジークフリートの遺体が横たわる薪に火がつけられるが、その薪の後ろから突然ブリュンヒルデが現れて、ジークフリートの剣でもって自分の胸を突き刺して、自害して果てる。この最終場面では、ジークフリートとブリュンヒルデの死でもって神々も没落していくことが表現されている映画であると言うことができよう。

以上がウーリー・エデル監督の映画『ニーベルングの指環』のあらすじであるが、全体は『ニーベルングの歌』とワーグナーのオペラを混ぜ合わせた内容になっていることが理解できよう。とりわけ最終場面は5、6世紀のブリュンヒルト伝説を彷彿(ほうふつ)させるような内容となっているが、ブリュンヒルトが神々から強い力を授かっているという点ではワーグナーの影響が読み取られる。全体のあらすじは『ニーベルングの歌』に従いながらも、とりわけブリュンヒルトとジークフリートについては古代北欧的な伝説をあてはめているような作品となっている。ブリュンヒルトがアイスランドの女王として登場しながら、北欧の神々に結び付けられているところが、この映画の特徴であると言えることができる。

おわりに

以上のように見てくると、ブリュンヒルトは古代の原型のときから中世を経て、近代および現代に至るまで、それぞれの時代のそれぞれの作品の中で多様に変遷を遂げて語り継がれていることが理解できよう。

まずブリュンヒルト伝説は5、6世紀の古代ゲルマン民族大移動の時代にライン河畔フランケン領土で生まれて、それが9世紀初め以降にヴァイキング等によって北欧に語り継がれて、その北欧の地で新たに北欧神話と結び付けられたブリュンヒルト像が作り出されていく。北欧の主神オーディン（ヴォータン）に結び付けられているところが特徴である。『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』等によって代表されるこの北欧第一次伝承では、ブリュンヒルトは竜退治の英雄シグルズ（ジークフリート）に想いを寄せるとともに、そのシグルズ（ジークフリート）と結ばれるグズルーン（クリームヒルト）に嫉妬を覚え、やがては両王妃口論においてひどい恥辱を受けて、この嫉妬や恥辱が復讐を呼び起こして、ジークフリート暗殺の原因となっているところが特徴である。とりわけ『歌謡エッダ』ではブリュンヒルトは「災い」をもたらす女性として描かれていると言える。

この北欧第一次伝承に対して、その後ドイツで新たに発展した伝説がハンザ商人たちを介して北欧のノルウェーに伝えられて、1250年頃に説話集としてまとめられた第二次伝承の『ティードレクス・サガ』においては、ブリュンヒルトに代わってクリームヒルトが中心人物となって、ブリュンヒルトは北欧との神々ともまったく関係づけられることもなく、名馬グラーネの所有者となっているものの、単にジークフリート暗殺の原因となる両王妃口論を始めるために登場しているに過ぎない存在となっている。

ライン河畔の伝説が東方に伝承されて、13世紀初頭に現在のオーストリアのドーナウ地方で成立した『ニーベルンゲンの歌』は、その『ティードレクス・サガ』に近い内容となっていて、ブリュンヒルトはアイスランドの女王として登場しているものの、脇役に過ぎず、作品全体のあらすじを動かすのはクリームヒルトになっている。

このドイツ中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』以後においては、ジークフリートが悪竜に誘拐された美女クリームヒルトを救い出す内容の物語となり、ブリュンヒルトは名前すら登場せずに、長い間、忘れられた存在であった。

そのブリュンヒルトが再び取り上げられるのは、19世紀になってからで、とりわけフリードリヒ・ヘッベルにおいてはブリュンヒルトはジークフリートとともに北欧神話的な人物として取り扱われている。

ヘッベルがその『ニーベルンゲン』三部作を書いている頃、リヒャルト・ワーグナーも楽劇『ニーベルングの指環』四部作の製作に取り掛かっているが、ワーグナーではブリュンヒルデはジークフリートとともに北欧の主神ヴォータンと結び付けられている。その点では素材に用いた北欧第一次伝承の『歌謡エッダ』や『ヴォルスunga・サガ』と同じであるが、しかし、その素材ではブリュンヒルトは嫉妬深く、恥辱を受けて、その復讐のために「災い」をもたらす女性として描かれていたのに対して、ワーグナーではブリュンヒルデは北欧の主神ヴォータンと知恵の女神エルダとの間に生まれた娘として母性的な愛でもってジークフリートの成長を見守り、長い眠りから目覚めてジークフリートの愛を受け入れて、人間女性として愛に生きる決意をしたところ、ハーゲン戦略によってひどい恥辱を受けて、それによってジークフリートに復讐を謀るものの、最終的には世界に「救い」をもたらす女性として描かれている。ジークフリートのあとを追って殉死するブリュンヒルデの「永遠に女性的なるもの」によって世界が救済されることが表現されているところに、北欧の素材とは異なるワーグナーの特異性が見出される。

このワーグナーによってブリュンヒルデは神々の「権力の世界」に代わって人間の「愛の世界」を築き上げる聖なる女性に高められているが、21世紀に入って製作されたウーリー・エデル監督の映画『ニーベルングの指環』(2004年)でも、ブリュンヒルデはアイスランドの女王として登場するものの、その強い力は北欧の神々から授けられたもので、神々のお告げに従ってジークフリートの求愛を待ち受ける女性として描かれている。北欧のエッダ・サガに見られるような魔性的な性質はどこにも見られず、ひたすら運命的なジークフリートの愛を待ち続けるアイスランドの女王として登場しているが、しかし、それだけ

にジークフリートによって裏切られたときに感じる侮辱は大きく、それがジークフリートへの復讐行為へとつながっていく。しかし、クリームヒルトから真相を知ったブリュンヒルデは、ジークフリートの遺体を焼く薪の炎の中で自害して果てる。そこにはブリュンヒルデのジークフリートへの運命的な愛が読み取られる。ブリュンヒルデが神々から占われた運命的なジークフリートへの愛を貫き通しているところに、この映画のブリュンヒルデ像の特徴があると言える。

以上のように見てくると、ブリュンヒルトがさまざまな変遷を遂げながら語り継がれていることが明らかであるが、このようなさまざまな変遷を遂げるブリュンヒルデの系譜を全体から眺めてみると、ブリュンヒルデ像の特徴は大きく二つに分けることができる。一つは北欧神話的な要素を多分に受けて、北欧の神々と関連づけられているもので、もう一つは北欧神話とは関係なく、ドイツの伝説と結び付けられているものである。ワーグナーのブリュンヒルデ像はそのうちの前者の方で、北欧神話的な要素が強くなっているが、しかし、素材のエッダ・サガと違って、「災い」をもたらす女性ではなく、逆に世界に「救い」をもたらす女性として描かれているところに、ワーグナーの特異性があると結論づけることができよう。ワーグナーのブリュンヒルデはその「自己犠牲」によって世界に救済をもたらす「永遠に女性的なるもの」の象徴なのである。そこにワーグナーのブリュンヒルデ像の特異性ととも、大きな魅力があると言える。

(2016・8・10)

※本稿は2016年3月26日(土)に西宮市民会館において行われた日本ワーグナー協会関西支部講演(14時～17時)の原稿に加筆修正を加えたものであることを付記しておく。